

共同研究プロジェクト
学生参加型のコミュニティワークにかかる実践的研究
 ～子ども食堂に関するフィールドワークをとおして～
 2017年度活動報告

杉原 努・寺田 博幸

はじめに

日本では1990年代から格差が目立つようになり、2000年代には社会学や社会福祉など各分野から格差を論じた書籍が多く発刊された。厚生労働省が発表した2012年の国民生活基礎調査の結果によると、子どもの貧困率は16.3%であり約6人に一人が相対的貧困状態にあるという過去最高の結果を記録した。これに伴い子ども食堂をはじめ子どもの居場所づくりが全国的に設立されてきた。

ちなみに、2015年調査における子どもの貧困率は13.9%であり、前回調査に比べ2.4%減、数に換算すると約47万～48万人の減少になる。この結果について政府は、完全失業率の減少に伴う雇用改善が進んだ結果だとしている。急激な現象には目を見張るものがあるが、OECD内において日本は未だ高い数値を維持している。子どもの貧困率の減少動向については依然として関心の高い問題であり、今後も注視していく必要がある。

なお、本報告書においては、地域の子どもへの食事提供、学習支援、居場所提供、相談支援などの拠点に関する表現として子どもの居場所とする。したがって、これは子どもに対する多様な機能を併せ持つ拠点という意味を持つ、ということを示しておく。

【向島キッズキッチン】

特徴	地区民生委員、ボランティア、当大学教員の協働により、子どもが買い物から調理まで実施し、生きる力をつけることにつながっている実践。
学生の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・ 向島ニュータウンの現状が想像していたより深刻だと思った。 ・ 買い物をして食事を作ることは、生きる力をつけることになると思った。など

研究の経過

そのような背景のもとで、2017年度から実施した当研究の目的は、

- 1) 大学周辺の「子どもの居場所」の設立経過や利用する子どもをめぐる生活状況を把握する、
- 2) 「子ども居場所」に関わっている教員による専門領域を超えた学際的研究を実践する、
- 3) 京都文教大学の学生が大学周辺の子どもの居場所への理解と支援を深め、コミュニティワークを実践的に学習する場を提供する、の3点であった。

この目的を達成するための一つとして、第1回目として2017年6月と、第2回目として2018年1月にシンポジウムを開催した。初年度は対象にした子どもの居場所の概要把握と、教員や学生の関わりの現状を把握することが主となった。

2017年度の研究の概要報告

1) については、第1回目のシンポにおいて4か所の子どもの居場所の実践を報告し、現状や課題などについて示した。4か所の居場所の特徴と、それを聞いた学生のアンケートの特徴は次のとおりである。

【Reos 榎島】

特徴	留守家庭児童や家庭環境に問題を抱える児童を対象に、生きる力を育むプログラムを展開している。子どものみならず、排除されない地域社会構築を目指している。当大学の小学校教員養成課程の学生が学習支援を実施している。
学生の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・特に運営を子育て中の母親スタッフに任せていることに驚いた。 ・スティグマへの配慮がやはり難しい問題なのかと改めて痛感した。 ・料理だけではなく理科の実験をするなど、学習にも力を入れておりすごく良いと思った。など

【グリーンタウン榎島（つなぐ）】

特徴	近隣付き合いから気づいた課題に対し、地域の子どもが参加できる場、情緒面、行動面、学習面、そして食事面といった視点で子どもたちをサポートしている
学生の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・地域福祉とはやはり人と人とのつながりなんだと強く思った。 ・さまざまな機関が「つなぐ」を包むことによって、さまざまな活動ができ、子どもたちに安心した場を提供できるのではないかと考えさせられました。 ・孤独感こそ簡単にはなくならないとお話しされていたので、さみしい思いをしている人には長い目で関わっていきたいと思った。など

【放課後の家】

特徴	ひとり親家庭の小学生を主な対象とし、学習できる場、適切な生活習慣を身につけるための様々な支援、交流会の実施、親への相談・支援などが実施されている。サポートを得た子どもたちの成長や変化が、他の子どもたちへのよりよい影響となっていく。
学生の感想	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもだけでなく、親の支援をその時その時で対応しているからこそ、子どもの変化にもつながっていくのではないかと考えさせられた。 ・ご飯は自分たちでつくる（買い物から）⇒自分で何でもできるように ・お迎えついでに話を聞く（相談支援） ・パソコンやipad、プログラミングや英語を先取りして触れておくというのはとてもいいと思った。など

2) については、学生も教員も子どもの居場所への学習支援、幼児への対応、誕生日会のお祝い行事などについて、共同できる範囲で活動している現状がある。例えば、「Reos 榎島」においては小学校教員養成課程の学生が、子どもを対象にした学習支援として関わっている。その基礎を築いてきたのは養成課程の教員であり、地域における実践を教員養成教育に活かすために、学習支援を考案した教員からのアプローチであった。

また、保育士養成課程に関わる本学教員は「グリーンタウン榎島：つなぐ」に主に関わっ

ている。「つなぐ」は小学生からそれ以上の学年の児童が参加することが多いため、主に幼児に関わる保育士養成課程の学生が関わりに戸惑うことがあった。その場面では教員が、学生が関わりやすく専門性を発揮しやすいような新たなプログラムの開発に努めていた。

さらに、SW を専門とする教員もいるものの、この領域においては未だ深まった関わりができていない。というのも、子どもの居場所を利用する子どもやその保護者の生活に関する相談については、相談日の設定や周知など相談できる条件が整っていないとか、相談日を設置できる

ほど子どもの居場所側との関係性が深まっていないなどの現状があるからである。また、保護者は子どもの居場所の運営スタッフに相談するという現状もある。教員は、直接的に相談を受けるといよりも、運営スタッフを支援するという方法も考えられる。

このように、2)については、それぞれの子どもの居場所に関わっている教員の学際的研究の現状の一部を把握するという段階である。

3)に関する学生の学びとして、2018年1月に開催したシンポジウムがある。それは、「『Reos 榎島』における学習支援活動から学ぶこと——見えてきた子どもの本音や求めていること」の開催である。これは、「Reos 榎島」に学習支援として関わっている教員養成課程の学生6名、スタッフ1名、コーディネーターの教員によるシンポジウムであった。学生の気づきや子どもの居場所からの学びについて、次の4つの観点から報告されその意味について会場参加者とともに深めていった。

- ①「放課後に見る子どもの姿と子ども理解」
- ②「心が安らぐ居場所づくり」
- ③「子どもどうしが協力し合う学習支援」
- ④「子どもと親の心を通わす対話」

学生の学びとしては、子どもは、学校で見せる顔や態度と子どもの居場所で見せるそれとは異なっているという点である。学校は勉強する場だからそれが主になり、いわゆる勉強させられその姿が評価の対象になる。だが、「Reos 榎

島」においては、子どもが楽しんでいるという姿を見ることができるといえるものである。

例えば、子どもの大人しさが解放されていく、近所のお姉さん目的に来る、かまってほしい、学校の批判をする、などというものである。これらを通して学生たちは、場に応じた子どもの様々な顔や思いを把握することができていると言える。

これらの体験は彼らが教員になった際に、広く子どもを理解するという観点から非常に役立つと思われる。勉強を教える教員というのみならず、子どもの多面的な顔や思いを知りながら教育を展開するという意味で、「Reos 榎島」における取り組みはキャリア支援になっていることが理解できる。

今後の課題

2017年度は初年度であったことから、個々の子どもの居場所については「Reos 榎島」におけるシンポジウムのみで終了した。他の3つの居場所についても当校の教員や学生が関わっているので、そこからの報告を実施する必要がある。それぞれの子どもの居場所におけるシンポジウムを次年度に開催していく。

また、学生が子どもの居場所に関わることでコミュニティワークを実践的に学習する場の提供について、彼らにとって長くても3年間ブラスアルファの期間しかない。この期間はコミュニティワークを学ぶ期間として短いものである。したがって、コミュニティワークに関する学びについては、その学習効果のあり方を検討する。